

「広島平和の旅」報告集発行にあたって

西東京市は、合併と時を同じくして、平成 13 年 1 月 21 日に「西東京市平和推進に関する条例」を制定しました。翌年の平成 14 年 1 月 21 日には、「非核・平和都市宣言」を行い、毎年 4 月 12 日の「西東京市平和の日」を始めとするさまざまな機会に、戦争体験を風化させないように次世代に継承する取り組みや、平和の意義を考えていく事業を行っています。

被爆都市へ市民を派遣する事業は、平和事業の推進・啓発活動の一環として、平成 13 年度から実施しています。

広島・長崎への原爆投下、そして終戦から 70 年が経過し、戦争を知る世代が少なくなり、戦争の記憶が薄れようとしています。

そのような節目の今年、6 人の市民の方々が広島を訪れ、平和記念式典への参列をはじめ、原爆ドームや平和記念資料館の見学、被爆体験者の講話等をおして、原爆や戦争がもたらす悲惨さや平和の大切さ、命の尊さについて理解を深め、また、この時期に広島を訪れることの意味を改めて考えるなど、多くの体験を持ち帰りました。

この報告集は、旅の様子や参加者の皆さんが得たことを多くの方に共有していただけるようまとめたものです。この報告集が、平和を考えるきっかけになれば幸いです。

平成 27 年 8 月 西東京市

平和宣言

私たちの故郷には、温かい家族の暮らし、人情あふれる地域の絆、季節を彩る祭り、歴史に育まれた伝統文化や建物、子どもたちが遊ぶ川辺などがありました。1945年8月6日午前8時15分、その全てが一発の原子爆弾で破壊されました。きのこ雲の下には、抱き合う黒焦げの親子、無数の遺体が浮かぶ川、焼け崩れた建物。幾万という人々が炎に焼かれ、その年の暮れまでにかけがえない14万もの命が奪われ、その中には朝鮮半島や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜なども含まれていました。

辛うじて生き延びた人々も人生を大きく歪められ、深刻な心身の後遺症や差別・偏見に苦しめられてきました。生きるために盗みと喧嘩を繰り返した子どもたち、幼くして原爆孤児となり今も一人で暮らす男性、被爆が分かり離婚させられた女性など——苦しみは続いたのです。

「広島をまどうてくれ！」これは、故郷や家族、そして身も心も元通りにしてほしいという被爆者の悲痛な叫びです。

広島県物産陳列館として開館し100年、被爆から70年。歴史の証人として、今も広島を見つめ続ける原爆ドームを前に、皆さんと共に、改めて原爆被害の実相を受け止め、被爆者の思いを噛みしめたいと思います。

しかし、世界には、いまだに1万5千発を超える核兵器が存在し、核保有国等の為政者は、自国中心的な考えに陥ったまま、核による威嚇にこだわる言動を繰り返しています。また、核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかになり、テロリストによる使用も懸念されています。

核兵器が存在する限り、いつ誰が被爆者になるか分かりません。ひとたび発生した被害は国境を越え無差別に広がります。世界中の皆さん、被爆者の言葉とヒロシマの心をしっかり受け止め、自らの問題として真剣に考えてください。

当時16歳の女性は「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる。思いやり、やさしさ、連帯。理屈ではなく体で感じなければならない。」と訴えます。当時12歳の男性は「戦争は大人も子どもも同じ悲惨を味わう。思いやり、いたわり、他人や自分を愛することが平和の原点だ。」と強調します。

辛く悲しい境遇の中で思い悩み、「憎しみ」や「拒絶」を乗り越え、紡ぎ出した悲痛なメッセージです。その心には、人類の未来を見据えた「人類愛」と「寛容」があります。

人間は、国籍や民族、宗教、言語などの違いを乗り越え、同じ地球に暮らし一度きりの人生を懸命に生きるのです。私たちは「共に生きる」ために、「非人道性の極み」、「絶対悪」である核兵器の廃絶を目指さなければなりません。そのための行動を始めるのは今です。既に若い人々による署名や投稿、行進など様々な取組も始まっています。共に大きなうねりを創りましょう。

被爆70年という節目の今年、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。広島市は、被爆の実相を守り、世界中に広め、次世代に伝えるための取組を強化するとともに、加盟都市が6,700を超えた平和首長会議の会長として、2020年までの核兵器廃絶と核兵器禁止条約の交渉開始に向けた世界的な流れを加速させるために、強い決意を持って全力で取り組みます。

今、各国の為政者に求められているのは、「人類愛」と「寛容」を基にした国民の幸福の追求ではないでしょうか。為政者が顔を合わせ、対話を重ねることが核兵器廃絶への第一歩となります。そうして得られる信頼を基礎にした、武力に依存しない幅広い安全保障の仕組みを創り出していかなければなりません。その実現に忍耐強く取り組むことが重要であり、日本国憲法の平和主義が示す真の平和への道筋を世界へ広めることが求められます。

来年、日本の伊勢志摩で開催される主要国首脳会議、それに先立つ広島での外相会合は、核兵器廃絶に向けたメッセージを発信する絶好の機会です。オバマ大統領をはじめとする各国の為政者の皆さん、被爆地を訪れて、被爆者の思いを直接聴き、被爆の実相に触れてください。核兵器禁止条約を含む法的枠組みの議論を始めなければならないという確信につながるはずです。

日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役として、議論の開始を主導するよう期待するとともに、広島を議論と発信の場とすることを提案します。また、高齢となった被爆者をはじめ、今この時も放射線の影響に苦しんでいる多くの人々の苦悩に寄り添い、支援策を充実すること、とりわけ「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

私たちは、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、被爆者をはじめ先人が、これまで核兵器廃絶と広島の復興に生涯をかけ尽くしてきたことに感謝します。そして、世界の人々に対し、決意を新たに、共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすよう訴えます。

平成 27 年（2015 年）8 月 6 日

広島市長 松井 一實

平和への誓い

昨年の8月20日、土砂災害に巻き込まれ、大切な仲間の一人を失いました。
今まで、当たり前のように一緒に過ごしていた仲間が、突然いなくなるという悲しみを知りました。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分

照りつける太陽の下、一発の原子爆弾が、建物、自然、そして、たくさんの人々の大切な命を奪いました。

この日のことを経験していない私たちですが、大切な人を失う悲しみは、想像することができます。

あの日から70年

今の広島は、色とりどりの花が咲き、緑豊かで、みんな笑顔で過ごすことのできる素敵な街です。

この街で、今、私たちは、平和への思いを感じています。

平和を考えるきっかけは、身近なところにあります。

平和記念公園で見たたくさんの折り鶴

広島平和記念資料館を訪れて知った原子爆弾による被害の事実

悲しみ、苦しみとともに、平和への強い思いが込められた被爆体験者の話

そして、私たちこども代表による「平和への誓い」

祖父母たちが、この70年間ヒロシマを生き抜いて、私たちに命をつないでくれました。

私たちは、今まで受け継がれてきた命と平和への思いを受け止め、考え、自分たちにできることから、「小さな平和」をつくろうとしています。

もう一度、身近な友達、世代の違う人々、様々な国や地域に住む人々と、平和について共に考えてみませんか。

広島に育つ私たちは、

事実を

被爆者の思いや願いを

過去 現在 未来へと

私たちの平和への思いとともにつないでいく一人となることを誓います。

平成 27 年（2015 年）8月6日

こども代表

広島市立白島小学校6年 桑原 悠露

広島市立矢野南小学校6年 細川 友花

参加者・旅程・事前学習会・旅先での様子

参加者

○中島 寿子さん ○安田 桂子さん ○横田 陽子さん
○中島 瑞季さん ○安田 理紗子さん ○横田 彩さん 計6人

旅 程

○1日目 8月5日（水）

時間	内容
8:30	東京駅より新幹線にて広島へ
12:31	広島駅到着
13:10	原爆ドーム、爆心地、原爆の子の像見学
14:00	広島平和記念資料館見学
15:00	旧日本銀行広島支店見学
16:00	被爆体験者による講話

○2日目 8月6日（木）

時間	内容
8:00	平和記念式典参列、献花
10:00	本川小学校平和資料館見学
14:35	広島駅より新幹線にて東京へ
18:33	東京駅到着、解散

事前学習会

7月24日（金） 午前10時～

平和の旅が、より意義深いものになるように、事前学習会を行いました。

事前学習会では、旅の主旨、行程、報告会等についての説明に加え、「非核・平和をすすめる西東京市民の会」会長の鈴木さんと事務局長の藤川さんを講師としてお招きし、広島と長崎に落とされた原爆のことや、西東京市と原爆とのつながりなどについて話していただきました。

参加者の方々は、この事前学習会により、「広島平和の旅」の趣旨や目的への理解をよりいっそう深めたようでした。

旅先での様子

8月5日は、平和記念公園内の原爆ドーム、爆心地、原爆の子の像、平和記念資料館、そして、旧日本銀行広島支店を見学しました。崩れたがれきがそのまま残る原爆ドームに圧倒され、爆心地では70年前に起こったことを想像し、原爆の子の像では平和への思いを込めて鐘を鳴らしました。



今年は被爆から70年という節目を迎えたためか、平和記念資料館は非常に多くの来場者で混雑しており、展示をじっくりと見ることはできませんでしたが、8時15分で止まった時計などの遺品が発する無言のメッセージや、放射線、熱線、爆風による被害の様子をさまざまな資料から学びました。

その後、昭和 11 年（1936 年）に建てられ、原爆投下時には爆風により窓枠やシャッターなどがすべて吹き飛ばされたという旧日本銀行広島支店で行われている被爆 70 周年記念展示「あの頃のひろしま」展と、あわせて開催されていた平和記念資料館「収蔵資料展」を見学しました。原爆の被害によって一変した広島の人々の暮らしの様子や、被爆当時の惨状を物語る展示品、そして、被爆した建物自体から、改めて原爆がもたらした被害と平和の尊さを考える機会となりました。

夕方には、原爆被害者福祉センター広島平和会館で、「広島県被団協・被爆を語り継ぐ会」の下畠準三さんの被爆体験を伺いました。

市内に下宿をして通った当時の中学校生活のこと、原爆投下当日から翌日にかけてご自身が遭遇したけが人や亡くなった多くの人々のこと、実家へ帰るために宇品港まで 7 時間以上歩き続けたことなどを話してくださいました。

下畠さんのお話によって、展示資料だけではわからなかった原爆がもたらした被害について、いっそう理解を深めることができました。



翌6日は、平和記念式典に参列しました。今年は、過去最多となる世界 100 か国の代表が参列したそうです。

式典では、原爆が投下された午前 8 時 15 分に平和への祈りと被爆者への慰霊の念をこめて、参列者一同が黙とうを捧げました。また、こども代表による「平和への誓い」では、自分たちが平和への思いをつないでいくことの決意が語られ、次世代へ継承していくことの大切さと平和への思いを新たにしました。



前日に見聞きしたこと、そして式典で発せられた平和への思いと決意のメッセージを受け止めながら、式典終了後には犠牲となった方々のご冥福と平和への願いを込めて慰霊碑に献花しました。

その後、被爆した状態のまま校舎の一部が保存され、原爆の被害を今に伝える本川小学校平和資料館を訪れ、爆心地に最も近い学校として大きな被害を受けたことがわかる写真や遺物などを見学しました。

2日間とも晴天に恵まれ、暑さ厳しい中でしたが、被爆直後の広島を想像しつつ、路面電車の走る音、道を行き交う車の音、蝉の声、そして人々の暮らしの音がする今の広島を各自が心に刻み、全行程を終えました。

被爆体験者による講話

講師 下畠 準三さん

日時 平成27年8月5日（水） 午後4時～午後5時

講師の下畠さんは70年前、14歳の時に被爆しました。地元の江田島に中学校がなく、横川一丁目に住む知人の家に下宿していた時のことでした。

「中学2年生の7月からは、武器工場に働きに行かされるようになり、そこで工場長から「お前たちは、今日から中学生ではない。」と最初に言われた。

8月6日、午前7時に家を出て工場に向かい、午前8時15分工場の正門に入った瞬間に稲光が見えた。オレンジの閃光が横切った瞬間に、雲が全て消え去り、ドガンと大きな音を立てて爆弾が落ちたのが分かった。

その夜、軍隊のトラックの荷台に乗せられた沢山の怪我人を降ろす作業を任されたが、皆皮膚がミルクチョコレート色で、触れるとはがれてしまった。診療所に運んだ人たちの唇が一様に「お…み…ず…を」と動く。水を手で掬い何度も何度も繰り返し、順番に与えようとしたが、そのうちにハエがたかりだし、次々と人が死んでいった。

家に帰る途中、鉄筋コンクリートで残っている建物以外、他は何もかもなくなっていた。自らが歩く足音だけが響き、他にはなにも聞こえない。線路を目印に歩く中、出会った軍人に「横川一丁目の方角には何もない、建物はない。」と言われ、そこで初めて帰る家がないことに気づき、足が震えだした。

8月6日は市内の中学生・女学生は一斉に屋外作業をしていたので、市内にいたら自分も生き残ってはいなかっただろう。」

参加者からの「原爆での苦難に対する怒りはどこに向かったのか」という質問に対して、下畠さんは「広島市に戻った時に確かに怒りはあったが、生きることと精いっぱいそれどころではなかった。被爆したのではと思い至ったのは、15年後。その時に改めて怒りを感じた」とおっしゃっていました。

資料館などだけでは知ることのできない、原爆投下による被害のリアリティや苦しみを参加者一人ひとりが下畠さんのお話から感じたようでした。



主な見学先ガイド

●平和記念公園

戦後、世界の恒久平和の願いを込めて、この記念公園が建設されました。公園内には、平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館などの施設や、原爆死没者慰霊碑をはじめとするモニュメントがあります。



●広島平和記念資料館

原爆の被害の実態を伝える資料を収集・展示し、広島で起こったこと、平和の尊さと核兵器の脅威を紹介しています。



●原爆ドーム …世界遺産

チェコの建設家ヤン・レツルの設計により、大正4年（1915年）に開館したこの建物は、被爆前は「広島県産業奨励館」でした。原爆は、ここから南東160mの上空約580mで炸裂し、建物は廃墟の残骸となりました。平成8年（1996年）、ユネスコの世界遺産に登録されました。



●原爆死没者慰霊碑（公式名：広島平和都市記念碑）

平和記念公園のほぼ中央にあるこの慰霊碑は、原爆犠牲者の霊を雨露から守る願いを込めて、家型ハニワに設計されました。石室には、原爆死没者名簿が納められています。



●原爆の子の像

この像は、原爆性白血病により12歳で亡くなった佐々木禎子さんの霊を慰め、世界平和をよびかけるため、昭和33年（1958年）に建設されました。たくさんの千羽鶴がささげられています。



●本川小学校平和資料館

爆心地にもっとも近い学校として、原爆の被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。「展示室」には、被害の様子が載った写真や、被爆した遺物があります。



感 想 文

皆さんがそれぞれの想いを胸に被爆地広島を訪れました。
そして、たくさんのことを見て・聞いて・感じてきました。
ここには、平和の旅をとおして、印象に残ったことを
ありのままに書いてあります。
今回旅に参加したみなさんには、
広島はどう映り、何を感じたのでしょうか。



※原則として、感想文などは原文のまま掲載しています。

『広島平和の旅』

中島 寿子

平和の大切さ、人命の尊さ、悲しみ、願い、、、、。

被爆 70 年の今年、「広島平和の旅」に参加させていただきました。

平和記念資料館、初めてでした。家族を奪われた怒りや悲しみ、戦争の残酷さ、親のいない孤児のつらさを思うと涙が止まりませんでした。

耐え難い経験、平和の尊さを次の世代をになう若人たちに引き継ぐ必要を強く感じました。我々に出来る事は「同じ過ちは繰り返さない」と宣言し、未来永劫、無限の長い年月戦争の苦しみを忘れず平和の鐘を鳴らし続けることだと思います。

旅に参加する前の広島のイメージ

- 式典の規模も思っていたより大きいものでした。
- 観光地としての広島と原爆投下地としての広島、この2つがどのようになっているか興味がありました。
- “活気ある都市”とのイメージありますね。



旅に参加した後の広島のイメージ

- 市民ボランティアが全力で取り組む様子、想像以上でした。
- 原爆ドームを中心に整備された街づくり。
- 戦後 70 年、広島という街は 8/6 を特別な日とする事で思いやりのある街づくりをしながら発展をしていくのだと思います。
- トラブルに対しての危機管理力の高い良い街だと感じました “活気ある都市”でした。

『広島平和の旅を通して感じた事』

中島 瑞季

私が今回、広島平和の旅に参加した理由は十三年前に行った広島で感じた印象に新たな視野を見出せないかと思ったからです。小学生の時に行った原爆ドームや資料館、被爆者のお話は“恐かった”という感想しかありませんでした。時を経て、被爆七十周年の区切りある年に行った広島は自身の中で新たな答えを導いてくれたと感じています。被爆した建物から感じる重々しい雰囲気、多くの外国人が関心を持って来日している事、被爆者の方のお話から伺える言葉にできないような気持ち、それらを吸収して強く思ったのが根本である核兵器自体の存在を無くす事の大切さです。日本国民からすると広島・長崎に落とされた原爆は許せない。しかしアメリカからすると真珠湾（パールハーバー）は忘れられないという。互いが傷付き苦しまないようにするには、これからの未来“核の廃絶”をスローガンに私はこの意見を持ち続けていきたいと思いました。歴史を見るとわかるように戦争を始めるのは簡単だが、終わらせるのは非常に難しいということ。この広島の旅を通して、私たちの未来が平和であるように、強く意識し、考える事の重要さを改めて感じました。何かの縁で参加させて頂き、大変光栄でした。本当にありが

とうございました。

旅に参加する前の広島イメージ

- 観光産業
- 港があるので、ご飯がおいしい
- 原爆が落とされた場所として、常にそれととり合わせにあって、少しさみしいイメージ

旅に参加した後の広島イメージ

- 良くも悪くも広島住民はあるがままの広島を受入けているような印象
- 13 年前に広島に来た時よりも外国人観光客に対しての対応が充実していたので、より強く “原爆” のことを伝えていきたいんだと再認識した。



『父の小さな記憶をつなぐ』

安田 桂子

「山の向うがピカッと光った。」当時 10 歳だった父の小さな記憶。広島市からは東に 30 km 以上はなれた町で生まれ育った父は、1945 年 8 月 6 日、小学校の校庭で広島市に原爆が投下された瞬間を目にしています。父親を、つまり私の祖父を戦地ミャンマーで亡くしていますが、私が父から戦争について聞かされたことは、この原爆の日のことだけだったように記憶しています。その戦死した祖父の残したアルバムには、美しい産業奨励館（原爆ドーム）の写真が残されています。

あれから 70 年。父もすでに亡く、父の小さな記憶を娘につなぎたいと、広島平和の旅に参加しました。

私は、広島県三原市で生まれ、その後となりの山口県で育ち、広島へは何度となく足を運び、平和記念公園や資料館へも訪れたことがあります。が、8 月 6 日の広島はやはり特別な一日でした。日本各地から、世界各国から平和を願う人々が集い、祈りを捧げる。公園も資料館も人であふれていました。

資料館の中に展示されていた被爆直後の市内の様子 of 模型。焼け残ったのは、わずかなコンクリートの建物の一部。娘に私が伝えられたのはそのぐらいでしたが、そのあとうかがった被爆体験者の方

の講話は、想像をはるかに越えていました。模型では表現できない現実。焼けたあとは赤く、翌日でも熱を帯びていた街、豆をまいたようにあった無数の遺体、その臭い。そして、昼間にもかかわらず音の無い静まりかえった街。その街を自分の靴のゴム底だけを響かせて、ご両親の待つ江田島へ向かったこと。市内の下宿先のご夫婦とは会うことは叶わなかったこと。8月6日の朝、市内の下宿先を出発し、向かった宮島方面の動員先工場で被爆した直後からのすさまじい体験を、鮮烈な記憶として語る被爆体験者の姿に、亡くなった方々の魂のようなものを感じました。

娘も小さな心で、この魂の響きを感じてくれたでしょうか。

戦争体験のない私ができること、父のあの小さな記憶を娘につなぐことが、ミャンマーで亡くなった祖父や、戦争で命を落とした人々の尊い人生に思いを馳せること、平和について考えることにつながるのではないかと考えています。

初代田無市長が軍医として赴いた広島で被爆されたこと、西東京市が2002年平和都市宣言を行っていること、これら事前学習会での学びとこの度の広島平和の旅を、私自身の、そして娘のちいさな成長につなげていきます。

旅に参加する前の広島イメージ

- 私の両親の生まれ育った県
- 私の生まれた県、育った山口県のおとなり
- 政令指定都市
- 観光都市
- 世界遺産の原爆ドーム
- 戦死した祖父が戦前（戦中？）に撮影した産業奨励館



旅に参加した後の広島イメージ

- 平和への願いを発信し続ける都市
- 平和を願う人々の集う都市
- 水の街
- カーブを愛し、応援する街



『平和の大切さ』

安田 理紗子

今、私たちは平和に生活をしています。それは、とてもしあわせなこと。けれど、今から 70 年前のこと広島に原子ばくだんがおとされました。たくさんの人のいのちをうばい、けが人もでました。そんな広島へ私たちは、1 泊 2 日の旅へでました。

1 日目、原ばくドーム、ばく心地、原ばくの子のぞう、を見たのがいんしょうてきでした。原ばくの子のぞうの近くに、ここへ来たみなさんがおそなえした干羽づるがありました。わたしもそこへ、行きの新かん線でおったつるを5羽くらいおそなえしました。それから少し時間がたった後、ひばく体けんしゃからのお話を聞きました。その中で一番心にのこったのは、びょういんの部屋で下ばたけさんと仲間が、「水を、水を」と言っている人みんなに水をくばって、ハエをおいはらった、ということでした。なぜなら、まだ中学生なのにけがの人を手当てするのは、素晴らしいことだからです。

2 日目は、まず少しときどきしていた式典から始まりました。なぜなら、式典は、知らない人ばかりが集まっているからです。そのあと、たくさんの人がならんでいるぎょうれつに入り、けん花だいにお花をおそなえしました。

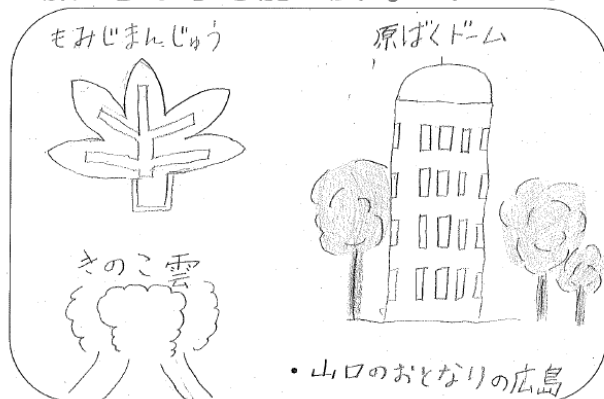
帰りの新かんせんでは、みんなでつるをおりました。40 羽しかお

れなかったけれど一生けんめいびょう気とたたかった、ささ木さだ
子さんは、自分のびょう気をなおしたいと思って作ったことは私に
もその気もちがよくわかりました。

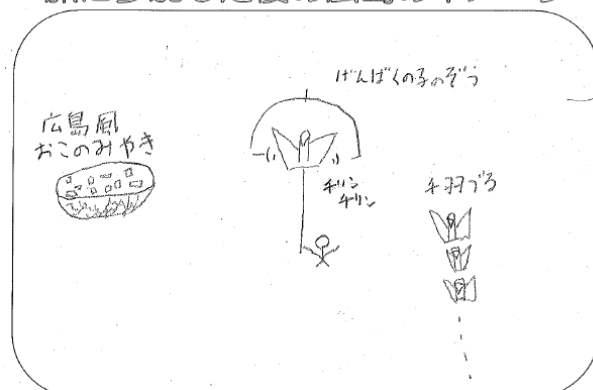
「せんそうはぜったいしてはいけない、ぜったいにさせない。」

そういう思いが少しでも広まったらいいなと思いました。

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加した後の広島イメージ



『平和祈念資料館で見たお弁当箱』

横田 陽子

真っ黒焦げのお弁当箱を平和記念資料館で見た時、私の中で原爆に対する意識が動きました。

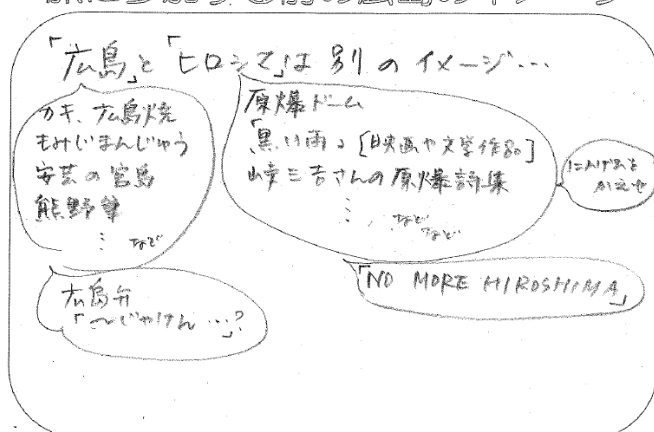
戦争は恐ろしい、怖い、怖い…ずっとそう思っているながら、子どもの頃から戦争や原爆に関する本をまともに読んだことがありません。それは何がどう怖いのか具体的に知ろうともせず、「怖い」という壁を立てて、戦争や原爆を正面から考えることを避けてきたにすぎません。遠い過去の悲劇。日本人としてきちんと知っておくべきことだけれど、自分の身に降りかかる可能性は低いもの。そのような気持ちでいたことは否めません。

平和祈念式典の前日、資料館は世界各国の人々で大変な混雑でした。展示物は一様に焦げるか曲がるか吹き飛ばされたもので、ただただその不気味な威力に圧倒されるしかありません。金属製のお弁当でも穴が開いて中身が焦げてしまうのかと恐怖しつつ通り過ぎるところでしたが——中身？あの焦げた炭は、ごはん粒？ 8時15分にお昼のお弁当に手をつけているはずもなく、温かさのほのかに残ったお弁当を持って出かけたばかりだったのかもしれない。作った人はお弁当が空になって帰ってくることを疑うこともなくご飯を詰めていたのではないか。すべて想像の域で、本当の悲惨さを簡単

にわかった気になってはいけないけれど、思いを馳せることで戦争や原爆と自分を隔てていた壁が取り払われた気がしました。ひとたび戦争が起これば、それはもう他人事ではありません。一瞬にして未来が吹き飛ぶのが怖い。大人にも子供にも容赦なく降りかかり、何の救いもない死が怖い。さらに人間は想像を超えた威力を持った武器を作りうる存在で、それを投下することを決断してしまう存在だということが空恐ろしい。

今年の8月6日はよく晴れていました。70年前も晴天だったと聞きます。同じ日に同じ場所に立つことに、特別な意味を感じざるをえません。多くの人と「ともに生きる」ために平和を守らなくてはと強く感じた旅でした。

旅に参加する前の広島イメージ



旅に参加する後の広島イメージ

- 緑と川が印象的な美しい都市。
- 世界中の平和を希求する人々が集まる場所。
- 驚異的な復興を遂げた活気溢れる町。
- 路面電車は昔からほとんどかわらぬ様子で、過去と現在は脈々とつながっていて懐の広い町なのだと思いました。

『平和は幸せ、戦争はつらい』

横田 彩

わたしは、今年の教科書にでてきた「一つの花」というおはなしをよみました。原爆のおはなしではなかったけれど、戦争は大変なことだと思いました。理由は、まだ生きられて、いろいろなことがしたくても、殺されてしまうからです。

戦争はおかしいと思います。なぜなら、同じ地球という星に生まれ育った人間で、仲良くしなくてはいけないはずなのに、てきができてしまい、殺すからです。

それと同時に、なんで米軍が原爆を落としたのか、ぎもんに思いました。なぜかというと、仲が良くても悪くても、殺し合いをしなくてはならないのか、と思ったからです。

しかし、米軍が原爆を落としたあと、本川小学校に、ビー玉や、ボールなどが、アメリカからおくられてきた、という事を聞いて、おどろきました。アメリカの人みんなが日本を本気でつぶそうとしていないと思ったからです。

原爆ドームや、爆心地、原爆の子の像、し料かんなどに行って、思ったり、学んだりしたことは、たくさん大切な命をそんなにかんたんにうばうことは、とてもひどいことだ、ということです。人のひふがとけてしまうほどあつくなるし、爆心地の近くは、3000

度～4000 度にもなったと聞いたので、爆心地の近くにいた人たちは、きっと死んでしまったと思うから、かわいそうだと思います。

これから先は、絶対に戦争をしてはいけないと思ったし、世界で助け合って仲良くくらしていける地球にしたいと思いました。

旅に参加する前の広島イメージ

食べ物がおいしい!

日本三景、あきのみやま

かき



旅に参加した後の広島イメージ

原爆ドーム

広島やき



戦争のことについて
いろいろ考えている。

非核・平和都市宣言

私たちは生きている。
おおくの人々が、それぞれの習慣や宗教をもち
様々な考え方と、異なる環境の下で生活している
この地球で

私たちは持っている。
この地球上で、健康で幸せな生活をする権利を
異なる考え方の人々を差別しない義務を

私たちは知っている。
おおくの人々が、今なお戦争で傷つき命を失っていることを
住みなれた平和な生活の場を追われて飢えていることを

私たちは訴える。
必要なのは笑顔での話し合いであることを
必要なのは人類愛と思いやりであることを

私たちは宣言する。
あらゆる人を傷つける地雷や武器をなくすことを
あらゆるものの破滅を招く核兵器をなくすことを
地球上から戦争をなくすことを

私たち市民のこの声と願いを
世界に広く訴えるために
非核・平和都市 西東京市の
宣言とする。

平成14年1月21日
西 東 京 市